

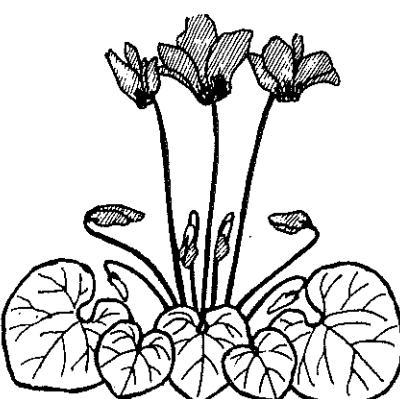
私たちの宗旨は「浄土真宗」と申します。  
淨土真宗のキーワードは「聞く」と言う一言  
です。

それにちなんでご法話  
◆ ◆ ◆  
私たちの宗旨は「浄土真宗」と申します。  
「聞く」という一言のなかで私と如来様と  
を偲んでお話をありました。

そのときのご法話は、例の「白骨のおご文  
章」そのままのこの方の突然の死を悼むこと  
からはじめて、次ぎにこの方が59歳、世に  
いう耳順(じじいの)の歳であつたこと、そしてこ  
の方が耳順の歳にふさわしい耳順(ききだ)がう  
(人の言うこと、人のこころに耳傾けてじつ  
くりと聞いてくださる)お人柄であつたこと  
を偲んでのお話をありました。

十月十四日、秋祭り。その夕方、突然亡くな  
った五十九歳の方のお通夜のおつとめが、  
区の公民館で行われました。町長さんや町会議員の方々その他大勢。大  
広間に入り切れないほどの弔問者でありまし  
た。

十月十四日、秋祭り。その夕方、突然亡くな  
った五十九歳の方のお通夜のおつとめが、  
区の公民館で行われました。町長さんや町会議員の方々その他大勢。大  
広間に入り切れないほどの弔問者でありまし  
た。



浄土真宗のキーワード  
は、「聞く」



が一つのいのちに生きかえるのです。そのこ  
とを「往生」と言うのです。

如来さまは永劫の昔からこの私の煩惱・苦  
しみ・悩みを聞き取って、そのわたしをこそ  
と呼んでいてくださいます。この如来さまの  
お呼び声のなかで私がハット如来のおこころ  
を聞き取らせていただくその一瞬一念に、如  
來は煩惱のわたしのなかにありありと働き、如  
えは如来のおおいなるいのちのなかに生きか  
える。それを浄土真宗では「信一念」「ご信  
心」というのです。

「わしの言うことを聞け」とばかりの年よ  
りや先生・政治家は沢山います。  
人のこころや子どもの言うことに全く耳を  
傾けようとしない親が多くすぎるようにおもい  
ます。

互いに「聞き合う」なかでこそ円満充実し  
た人間関係もできるのではないか。どうか。

今日のお通夜も、明日のお葬式も、決して  
お別れのための営みではありません。  
お念佛のお呼び声のなかで、亡き人との「  
新たな出会い」をもたしていただきとなみ  
としたいものと、わたしは切に念じることで  
あります。

◆ ◆ ◆  
「浄土真宗のキーワードは聞く」。

わたしは生まれたときから真宗の門徒であ  
ったのに、それなのに、わたしの暮らしはどう  
うだったんだろう、「これわたしのいのち。  
わたしの力で生きているの。わたしの責任で  
生きて行くわ」

依怙地な傲慢な井の中の蛙を生きていたわ  
たしではなかつたのか。  
わたしは深刻に我が身を顧みたお通夜であ  
りました。



## 11月17日は 清掃奉仕

午後2時集合

境内除草(鎌・鋤)  
仏具おみがき

会員の皆様ご協力ください。

〈佛教青年会〉  
〈佛教婦人会〉

十月十四日	葬儀
亀井千代造さま	出石・川原町
五十九歳	



## 報恩講

11月17日は

清掃奉仕

午後2時集合

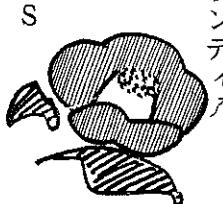
境内除草(鎌・鋤)  
仏具おみがき

会員の皆様ご協力ください。

〈佛教青年会〉  
〈佛教婦人会〉

## 十一月のことよみ

二十七日	十一月一日	十一月一十一日	十一月二十日	十一月二十一日	十一月二十二日	十一月二十三日	十一月二十四日	十一月二十五日	十一月二十六日	十一月二十七日	十一月二十八日	十一月二十九日	十一月三十日
D S	御傳鈔	勤行・法話	勤行・法話	御傳鈔	御傳鈔	御傳鈔	御傳鈔	御傳鈔	御傳鈔	御傳鈔	御傳鈔	御傳鈔	御傳鈔
奥栗雄報恩講	正福寺報恩講	正福寺報恩講	正福寺報恩講	正福寺報恩講	正福寺報恩講	正福寺報恩講	正福寺報恩講	正福寺報恩講	正福寺報恩講	正福寺報恩講	正福寺報恩講	正福寺報恩講	正福寺報恩講
佐田報恩講	湯口富雄氏宅法事	湯口富雄氏宅法事	田中啓一氏宅法事	田中啓一氏宅法事	龜井千代造氏忌明法事	真覚寺報恩講	西方寺報恩講	西方寺報恩講	木本博氏宅法事	木本博氏宅法事	木本博氏宅法事	山田弘之氏宅法事	立冬



## 明日がある

高校二年



「りやー頑張らにやならんのはわかつとるが  
そやかておじいちゃん、絶望しとる訳じゃー  
ない。悲しんで滅入つてゐるわけではない。  
おじいちゃんにはおじいちゃんのへあしたが  
すぐ死んでしまうんや。もうが  
いくら頑張つても、先が知れとるのや。もうが  
ある、明日があるサー」なんや」、

今、この歌が大流行です。  
おにいちゃんなんか一日中この歌を歌つて  
そのリズムに乗つてくらしているようなもん  
です。なぜかと言つて、この兄ちゃん、この  
歌の歌詞にあるように、リストラ旋風吹き荒  
れるなかで、辛うじて会社に残れたんですか  
ら。そんな経験から兄ちゃん、何があつても  
何が起きてても、ガッカリするな、明日がある  
明日があるさーとうたいながら自分自身を励  
ましているんです。

夕ご飯のときお茶碗たいて歌つている兄  
ちゃんに、さつそくおかあちゃんが噛み付き  
ました。  
「アホみたいな歌、やめなさい！ おかあち  
ゃん高校のとき習つたわ。〈懈怠のビクは明  
日を期す〉って。『徒然草』の時間に習つた  
の。怠け者坊主はいつでも明日がくる明日があ  
ると、明日にばかり期待をかけて、一生無駄  
に過ごしてしまうんやで」  
しかしおにいちゃんは全く無視。  
「いつかはわかつてくれるだろ」と。

と、お兄ちゃんにメロメロの八十三歳のお  
じいちゃんがいました。  
「あしたがあつていいなー。あしたがある  
つて素晴らしいなー。いいじゃーないかお母  
さん。おじいちゃんなんかにはもう明日はな  
いんや。」  
おじいちゃんは昨年秋口腎臓で三ヶ月入院  
して、退院したいまも療養中です。  
するとまたお兄ちゃん。  
「あかんあかん、おじいちゃん。そんなにへ  
チャゲてしまつたらあかんのやで。明日があ  
る明日がある、明日があるサー。頑張つてえ  
やー。」

「別修報恩講。特設舞台での仏社仏  
婦の若者？みんなさんの乱舞・カラオ  
ケ絶唱・優雅なおどりに盛り上がり  
たひとときでした。



別修報恩講。特設舞台での仏社仏  
婦の若者？みんなさんの乱舞・カラオ  
ケ絶唱・優雅なおどりに盛り上がり  
たひとときでした。

そここのところの細かな理屈は私にはまだわ  
からないけれど、最近のおじいちゃん、なん  
のこだわりもなく淡淡と養生し、ごくごく自  
然にゲートボールをたのしみ、そしてたのし  
んで老人会長の仕事もこなして人から慶ばれ  
ています。

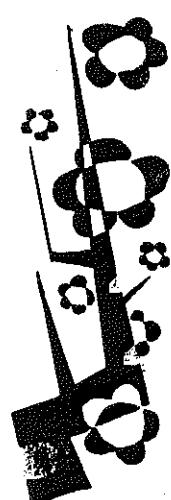
いちばん戸惑わるのは、「数え年」と「  
満年齢」です。  
「満年齢など」というのは、アメリカがもつ  
て来たヤツや。わしらは母親から産んでもら  
った。親のおなかにできたときからがわしの  
いのちや。それを、どの村のどの家に生まれ  
た日、そこからが人間やなんて。そやから  
どそここの家の子、何村の子供や言うて「生  
まれによる差別」がよけいにいわれ始めたの  
とちがうか。そのことから思うと、やっぱり  
日本昔の「数え年」にかえさんといかんと  
思つわ」

それからせつかくのいのちを、なんやらゴ  
ロ合わせみたいな呼び方するのもどうかと思  
うわ。十干十二支いうのかエトというのか。  
ネズミ年、ヘビ年というあれ。  
あんたヘビ年やつたん。道理であんた執念  
ぶかいなーなんて。

わたしは本当の生まれば。ネズミ年の十二  
月です。しかし役場への届けはウシ年の正月  
ですのや。ほやさかい時には「道理でチヨマ  
チヨマト小回りきてせわしあすなーと言わ  
れたり、ときには、やっぱりさすが牛年、ど  
つしりと落ち着いておられますなーなんて。  
エトで占つてもらつてわたしウロウロします  
がな。」

それからちよつと賢こぶつた歳の呼び方で  
すが、喜寿とか傘寿とか卒寿とか白寿。これ  
もまあ、数字あわせゴロあわせもええとこで  
す。何のいみも意義もない数えかたです。

ちょっと意味のありそなのは、ホレあの  
論語。孔子さまの「いのちの節目節目」を押  
さえた云い方。



## いのちの数え方

九月は敬老月間。

それでデーサービスにこられたお年寄りと  
いのちの数え方「年齢」の読み方にについて  
お尋ねしてみました。

いちばん戸惑わるのは、「数え年」と「  
満年齢」です。

「満年齢など」というのは、アメリカがもつ  
て来たヤツや。わしらは母親から産んでもら  
った。親のおなかにできたときからがわしの  
いのちや。それを、どの村のどの家に生まれ  
た日、そこからが人間やなんて。そやから  
どそここの家の子、何村の子供や言うて「生  
まれによる差別」がよけいにいわれ始めたの  
とちがうか。そのことから思うと、やっぱり  
日本昔の「数え年」にかえさんといかんと  
思つわ」

そこで九十歳まで長命の親鸞さまに尋ねて  
みました。

十九歳のとき聖徳太子の夢のお告げで「い  
ま今日しかないのちをどう生きるか」を問  
いかけられて以来、一日一日一年を真剣  
に生きて来たその親鸞さま。無量寿というお  
おきな如来さまのいのちのなかに生きる刻々  
のいのちを実感しながら感謝しながら、いた  
だいた年齢をすべての著書に書きとめておら  
れるのです。

無量寿のなかいたいた今日の命を、数え  
数えて大切に生きたいものだとおもいます。



10月23日(火)、恒例「別修報恩講」。この日を楽しみに九十  
八名の参加者。正信偈・ご法話のあと弁当をいただきながら懇親。秋  
の夜長を楽しく有意義に過ごしました。

わたしもやがて七十八歳になります。